岡山理科大学紀要 第35号 B pp. 37-45(1999)

古代の吉備における加耶について

——吉備・加耶交流史に関する覚書——

志野　敏夫
岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1999年11月4日　受理)

はじめに

1999 年4月、岡山理科大学の支援を受けて、「岡山学」という研究会を発足させた。これは、理系・文系の研究者の枠を越えて、総合的に岡山を研究しようという試みである。

こうした研究会を作ろうと思い立ったのは、総合情報学部ができて、教員の中にも学問の総合化・学際化を目指そうという機運があったことにもよるが、個人的には2つほどの動機があった。ひとつは、もともと歴史学は総合科学の側面をもつが、歴史の諸相を理解するためには、いわゆる理系分野の成果も知っていなければならないという理由であった。近年は考古学の成果の吸収、ないしは両者の融合がさかんにいわれる。そうしたなかで、考古学の専門家達とともに、韓国南部や中国の四川地方を見学・調査する調査隊を組織して何度か調査を行う機会に恵まれた。そこで痛感したのは、その地域の歴史を理解するためには、その地域を巡る「文化」的交流の様相を解明する必要があるということであった。具体的には、道具・農業技術・建築・金属生産・漁業技術・養蚕法などのありかたと、アジア全域を視野に入れたそれら諸技術の交流である。そして、それらを解明し理解するには、植生・鉱物・土壌・地質・気候等々、自然科学分野の成果の知識が不可欠なのである。

いまひとつは、より個人的な体験に基づいている。すなわち、5年ほど前に岡山に赴任してきたとき、そこで見た風景が、調査で行った釜山や金海を中心とした韓国南部の風景にあまりにもそっくりであったことである。いずれの地も、南に向かって比較的「おだやかな」山並みがあって、そこから川が流れ出し、扇状地形からやや開けた平野部を抜けて、むこうに海と島が望見できるのである。地理学には、景観学という分野があるが、同じ様な風景を生み出す地理的条件は、同じ様な人々の生活様式・タイプを生み出したり、あるいはある特定の技術の導入を他の地域よりも容易にするのではないか。そしてやはりここでも、その解明には、植生から気候等々の知識が必要とされるであろう。

そこでこころみに調べてみると、古代において、吉備に大量の加耶（古代南朝鮮地域にあった小国群の総称。『日本書紀』ではしばしば「任那」と記される。）の人々が渡来したのではないかと思われるのである。岡山県上房郡賀陽町の存在である。岡山県の内陸・中央部やや南、岡山市の西北に位置する。以前は現在の総社市や岡山市の一部を含む賀陽郡であり、『続日本紀』には「賀陽郡」とするが(1)、『和名抄』では「賀夜郡」と表記されている。さらに古く、飛鳥池遺跡出土の木簡には「加夜評」と見え(2)、かなり早くから成立していた。「加夜」は「カヤ」と発音するとされ、したがって朝鮮の加耶と何らかの関係があるであろうと考えられるのである。

しかし、このことについては、一般には推測というより指摘がされる程度であり、盛んに行われている古代吉備の諸研究において、専論されたことはない。

そこで、文献史料がきわめて限られており、この問題の解明は新たな考古学的発見を待つといった状況ではあるが、現時点で主に文献史料からどのようなことが考えうるか、交流史の観点から、私見ないし「試見」を述べてみたい。

吉備のカヤ氏

カヤは、地名にだけではなく、姓にも残されている。ちなみに現在では、岡山県版の電話帳によって調べてみると、賀陽のほか、萱・賀屋・嘉屋・嘉陽・榧・加陽・通生などの姓が見られる。

賀陽氏に関しては、藤井駿氏の研究などがあるが(3)、それらによれば、『扶桑略紀』に引く『善家秘記』

や『今昔物語』に賀陽郡足守郷に本拠をもつ富豪の賀陽良藤の物語があり、彼はその財をもって備前国少自となったという。そのほか『政治要略』寛平５年条には良藤の兄弟、賀夜郡大領賀陽豊仲の名が見えるなど、平安期には京都にもその名が聞こえる、吉備においては政治・経済を牛耳る勢豪家であったことがうかがえる。一方、吉備国の人々から吉備の大氏神として尊崇され、仁寿２年（852）からは官社に列せられた吉備津神社とのかかわりでは、『続左丞抄』の延久２年（1070）にみえる備中吉備津彦神社（現在の吉備津神社）神主賀陽貞政朝臣を賀陽氏神主の初見として、享保元年（1716）に徳川幕府によって神官職と家財没収、重追放に処せられるまで、次第に衰微していったものの、代々神主をはじめ多くの神職に奉仕し、それらを世襲していた。なお、臨済宗開祖の栄西は、先述の賀陽貞政朝臣の曾孫である。

このように平安期よりながく吉備国において、賀陽氏は顕姓・貴姓として存続した。だが、その淵源はよくわからないとされる。『日本書紀』応神天皇 22 年秋９月条に、御友別（ミトモワケ）の中子である仲彦（ナカツヒコ）が香屋臣（カヤノオミ）の祖である、とする記事が最も早いものであるが、もとよりどの程度信頼できるかはわからない。

ただ、702 年時の内容を伝えるとする「国造記」を元に書かれたと思われる『国造本紀』に、吉備の九国造のひとつとして「加夜国造」があり、諸々の研究者は、少なくともこの段階でカヤ氏（加夜氏、賀陽氏）は成立していたであろうと考えているようである。つまり、上述の応神記では、応神天皇が吉備の葉田の葦守宮に行幸した際、御友別が兄弟子孫を膳夫（カシワデ）として食事を奉った。これに喜んだ天皇が吉備を分けて御友別の子らに分封する。すなわち長子稲速別（イナハヤワケ）を川島県（アガタ）に、中子仲彦を上道（カミツミチ）県に、末子弟彦を三野県に、弟の鴨別を波区芸（ハクギ）に、兄の浦凝（ウラコリ）別を苑（ソノ）県に封じた。そして稲速別は下道（シモツミチ）臣の、仲彦は上道臣・香屋臣の、弟彦が三野臣の、鴨別が笠臣の、浦凝別が苑臣のそれぞれ始祖であると記する。他方『国造本紀』は、稲速別は下道国造の、仲彦は加夜国造・上道国造の、弟彦は三野（ミノ）国造の、鴨別は笠臣国造の始祖であるとするのである。一般にこれらを吉備の始祖伝承と呼んでいる。そこで通説では、香屋臣が加夜国造になったとし、香屋臣＝加夜氏＝賀陽氏と考えるのである。であるならば、カヤ氏は 702 年より前、７世紀の後半には成立していたということである。さらに、門脇禎二氏は、『日本書紀』舒明天皇２年１月条にある舒明天皇が吉備国の蚊屋采女（クネメ）を召して蚊屋皇子（ミコ）をもうけた、という記事をもって、加夜国造が６世紀末には任命されていたことの証拠だとされる(4)。したがってまた同時に、カヤ氏も６世紀末には存在していたということでもあろう。

ところで、ここで注目されることが２つある。

まずひとつは、この加夜国造の領域が非常に広かったという点である。高梁川の東岸から、足守川と笹ヶ瀬川の間あたりまで、おおよそ現在の高梁市・総社市・賀陽町と岡山市の一部を含むというものであった。足守川河口付近では、当時は海岸になっていた。一般的に理解されているように、国造がおおむね在地首長をその支配領域とともに任じたものだとするなら、これほどの領域を国造成立時にもったということは、それ以前において、すでにカヤ氏が相当な勢力を持っていたということであろう。

そして第２点目は、香屋臣は上道臣とその始祖を同じくするとされていることである。上道臣は、紀記にしばしば登場する一族で、下道臣とならんで、吉備の有力豪族であった。「吉備王国」の実態が、部族連合体であるか首長結合体であるか、なお議論の余地はあるが、上道臣がその中でリーダー格の一族であったことは確かのようである。もちろん、本当に同祖から分流したのか、それとも本当は、もとは別の一族であったであったのかを応神紀や『国造本紀』の記述だけから直ちに判断することはできないと私は考えるが(5)、少なくとも、上道臣と香屋臣が深い関係にあったことが、紀に反映されたと考えてよいであろう。

いずれにせよ、これらのことから、６世紀の末までには、したがって６世紀の前半には、カヤ一族は吉備において大きな勢力をなす、重要な一族であったことがうかがえるであろう。

吉備上道臣田狭と加耶

それでは、この吉備のカヤ氏は朝鮮の加耶と関係があったのか。

この問題の手がかりになると思われるのが、いわゆる吉備上道臣田狭（タサ）の反乱と称される事件の記事である。これは、『日本書紀』雄略天皇７年条に、吉備下道臣前津屋（マエツヤ）の誅殺事件に連続して描かれるのであるが、いま田狭の事件のあらましだけを略述すると次のようである。

> 吉備上道臣田狭が自分の妻稚媛（ワカヒメ）を自慢したのを聞いた雄略天皇が、稚媛を奪おうとして、田狭を任那国司として朝鮮に送り出してしまう。任地で妻を奪われたことを知った田狭は、当時ヤマトとの関係が悪化していた新羅に援助を頼ろうとした。そこで天皇は、田狭の（稚媛との間に生まれた）息子である弟君（オトキミ）と吉備海部直赤尾（アマノアタイアカワ）を派遣して新羅を討たせようとした。その際、進言によって、半島の才伎（テヒト）（技術者）

を連れ帰る任務も負わせた。しかし弟君は、戦いを避けて、才伎を集めただけで帰国しようとしたので、これを見た田狭は、弟君に人を遣わせて、「おまえは百済によりつつ日本と通え、私は任那によって日本には通わない。」と勧めた。これを知った弟君の妻樟媛(クス)は、ヤマトへの忠誠心から、夫の弟君を殺害して、百済が献上した才伎を引き連れて帰国した。〔或本にいわく、吉備臣弟君は、百済から帰還して漢手人部(アヤノテヒトベ)・衣縫部(キヌヌイ)・宍人部(シシヒト)を献上した、という。〕

もとより、津田左右吉氏以来(6)、本条に書紀編者の造作があることが指摘され、全文をそのまま信ずることはできない。しかし、その中でもなお、何らかの史実をその背後に読みとることは可能であろうと考える。そのひとつが、「吉備上道臣田狭」とあることである。

吉備一族が朝鮮との外交にしばしば登場することは、つとに知られている。「任那滅亡」以前で、先の雄略紀７年条以外では、雄略紀８年２月条の吉備臣小梨(ワナシ)、雄略紀 23 年８月条の征新羅将軍吉備臣尾代(ワシロ)、欽明紀２年４月・５年３月・同年 11 月の任那日本府吉備臣がみられ、滅亡以後は吉備海部直のみが登場する。ここで、任那＝加耶滅亡以前では先の雄略紀７年条以外はすべて「吉備臣」とされるなか、田狭がはっきりと「上道臣」と記されるのである。この点、かなりの信憑性を認められるのではないだろうか。

その吉備上道臣田狭が、任那国司となり、また任那に亡命しようとしたという。国司は雄略期にはなかったのであるから、ここにも問題はあるが、欽明紀の任那会議で日本代表として登場する任那日本府の人物が吉備臣であることからしても、吉備一族が任那＝加耶と深い関係にあったことをうかがわせる。

では、どのように関係を結んでいたか。それもこの記事の中に示唆されているように思える。田狭の子弟君の妻樟媛の存在である。まず、彼女は征討戦を行う現場、朝鮮にいたことになる。戦闘に婦人を伴うケースがなかったわけではないが、この場合それはなぜであろうか。そして次に、本文では夫の弟君を殺して才伎を連れ帰るのだが、異伝では弟君が才伎を引き連れて帰還したという。この違いをどう考えればよいであろうか。樟媛の忠誠心を賞揚する文言は、中国の『文選』に類句があるという指摘からすると(7)、忠誠心から夫を殺したとする筋立てには書紀編者の修飾を感じる。しかし、その不自然さにかかわらず、あえてここに樟媛が登場しているということは、彼女がこの物語の中、すなわち才伎を連れ帰るということにおいては、登場すべき重要性をもっていたというのがその理由ではなかっただろうか。才伎を招来することは、西漢才伎歓因知利(カワチノアヤノテヒトカンインチリ)なるものが提案し、彼はまたこの遠征軍にともなって半島に赴いている。それにもかかわらず、樟媛が才伎を連れ帰ったと記述されるのは、彼女がいたからこそ、百済の才伎を連れ帰ることができたからではなかったか。とするならば、彼女は、技術者を集めて日本に送り出すことのできるような、現地の重要な地位にあった者の娘であったと考えられないだろうか。つまり、吉備上道臣弟君は、半島（百済か）の女性と結婚していたということになる。このことに関連して、吉田晶氏が重要な指摘をされている。氏は、『日本書紀』継体天皇 24 年９月条に「吉備韓子那多利・斯布利」とあり、その分註に「大日本人、娶蕃女所生、為韓子也」とするのをもって、「「吉備韓子」が吉備一族の男性と任那の女性の間に生まれた子であることは確実としなければならない。」とされ、さらに彼らは任那において一定の政治的役割を担っていたといわれ、こうしたことから「吉備氏」が「任那地域の状況を把握しつつ独自の交流をすすめていたとみてよい」と断じられている(8)。加耶地方、とくに金官加耶や安羅近辺から、集中的に倭系遺物が出土していることは(9)、その証左になると私は考えている。樟媛と上道臣弟君もまた、そのような政治戦略によった婚姻関係であったのではなかったろうか。また、このことから見れば、任那復興会議が不調に終わってのち、大加耶（加羅、現在の高霊）が滅亡する欽明 22 年（562）までのあいだ、加耶諸国がつぎつぎに新羅によって併合されていく最中の欽明 16 年に、吉備の５郡に白猪屯倉が置かれるというのは、その強勢の源でもある加耶を失った吉備に、ヤマト政権が支配のくびきを打ち込むという、連動したものとすることができるであろう。

一方、当時の国際状況は、加耶諸国の側でも倭の国と婚姻関係を結ぼうとしたであろう情勢であった。雄略７年はそのまま計算すると 463 年のこととなるが、素直に受け入れることはできない。それは、例えば倭の五王武＝雄略天皇の前代である興が中国南朝の宋から授爵したのが 462 年で、『宋書』によればその後に興が死んだと記されるからである。しかし、稲荷山鉄剣の銘「辛亥年」を 471 年だという諸氏の説に従えば、ワカタケル大王＝雄略天皇は 470 年代には少なくとも在位していたと考えてよいだろう。この時期半島情勢は、大きく転換しつつあった。高句麗の攻勢が巨大なものとなって南方を圧迫したのである。北部の加耶諸国はおおむねこのころまで百済との関係を深めており、南部はそのほかに倭との関係も強かった。ところがその百済が、470 年代ごろから高句麗の強大な圧力にさらされはじめ、ついに 475 年には漢城を陥されて一

時滅亡するという事態になってしまったのである。田中俊明氏はこのことが、北部高霊の大加耶を中心とする連盟を形成させる契機であったとし、連盟の形成の結果、479 年の「加羅王」による中国南朝斉への遣使につながったとされる(10)。従うべきであろう。こういう状況の中、彼らは倭の諸国とも太いつながりを求めたのではなかったろうか。そしてそのときの方法をうかがわせるのが、やや後の時代、6 世紀になって今度は復活した百済が加耶を圧迫したときの動向である。加耶は百済に対抗するために新羅と結ぼうとするのであるが、そのとき新羅に婚姻を申し込んでいるのである。この時は結局破綻するのであるが、5 世紀の後半、加耶・吉備双方の思惑が合致した婚姻はかなり行われたのではなかったろうか。

このように、吉備一族と加耶諸国とが婚姻関係にあって、吉備韓子が加耶にいて活躍していたとするならば、当然吉備の側にも、加耶の媛たちについてやってきた人たちをはじめ、多くの加耶の人々がいたであろう。加耶の王子と結婚した吉備の女性も、そして「加耶の吉備子」とでも言える人々もいたかもしれない。加耶の人々かどうかを直接示さないが、雄略紀 9 年 5 月条に、吉備上道采女大海(オホシアマ)が、新羅遠征中病死した夫の紀小弓宿禰(キノヲユミノスクネ)の墳墓築造に尽力した大伴室屋大連に、その礼として「韓奴(カラノヤッコ)室・兄麻呂・弟麻呂・御倉・小倉、六口を」送った、という記事は、吉備に渡来人がいたことの証左であろう。岡山市新庄下にある榊山古墳からは、南部朝鮮に出土例の多い、一方で日本では例をあまりみない馬形帯鉤や加耶系の陶質土器片が出土している(11)。これはこの地に加耶系の人々が移り住んでいた有力な証拠であろう。そしてやはり、注意したいのは、弟君も韓奴の話しもこれらがすべて「上道臣」であるという点である。前節で見たように、香屋臣は上道臣と同祖から出たとされていたのであったが、それはこうした上道臣の加耶との積極的な交流の結果、多くの加耶からの人々が上道臣のもとにいたことが背景となっていたのではなかっただろうか。

また、この加耶は、6 世紀には各個撃破、徐々に新羅によって征服されていき、最終的には562年、大加耶の陥落によって滅亡する。この過程で、関係を伝ってさらに多くの加耶人が吉備に渡来し、この時期、吉備における加耶人の勢力は一気に増大したであろう。前節での推論と見事に符合するのではないだろうか。

温羅伝説と加耶

以上はおもに『日本書紀』によって、古代吉備と加耶・朝鮮の関係を見てきたのであるが、これ以外に注目されるのが、カヤ氏の末裔である賀陽氏が代々神主を世襲していた吉備津神社に伝わる「温羅(ウラ)伝説」である。岡山では桃太郎説話の原型といわれるものである。

この伝説については、藤井駿氏が吉備津宮縁起の諸異本を総合された成果があるので(12)、それによって物語のあらましを記しておく。

> 崇神天皇（垂仁天皇ともいう）のころ、異国から鬼神が吉備国に飛来した。彼は百済の王子で温羅といい、吉備冠者とも呼ばれた。凶悪な彼は、備中国の新山に居城を構え、西国から都に送る貢物や婦女子しばしば奪ったので、人々は恐れて居城を「鬼ノ城(キノジョウ)」と呼んで天皇に訴えた。そこで朝廷は孝霊天皇の皇子の五十狭芹彦命(イサセリヒコノミコト)を遣わした。大軍を率いたミコトは吉備の中山（吉備津神社がある）に陣を布き、西の片岡山に石楯を築いた。楯築神社（倉敷市王墓山丘北端）はその遺跡である。
>
> 温羅と戦ったミコトの放った矢はいつも鬼神の矢と空中と噛み合い、いずれも海中に落ちた。矢喰宮(ヤグイノミヤ)（岡山市田中）はその弓矢を祀っている。そこでミコトは千鈎の矢を以て一時に二矢を発したところ、一矢が温羅の左目に当たり、血潮が流水のごとくほとばしった。血吸川(チスイ)（総社市阿曽から流れて足守川にそそぐ）はその遺跡である。辟易した温羅は雉に化して山中に隠れたが、ミコトは鷹となって追いかけたので、温羅はまた鯉と化して血吸川に入って跡をくらました。ミコトは鵜になってこれを噛みあげた。いまそこに鯉喰(コイクイ)神社（倉敷市矢部の氏神）があるのはその由縁である。ついに温羅はミコトの軍門に降って「吉備冠者」の名を献じたので、以後ミコトは吉備津彦命と改称した。
>
> ミコトは鬼の頭をはねて串に刺して曝した。備前の首村（現在の岡山市平津）はその遺跡である。ところがこの首は何年も大声を発して唸り響いて止まなかった。ミコトは部下の犬飼武(イヌカイノタケル)に命じて犬に食わせた。しかし髑髏になってもなお吠え止まないので、ミコトはその首を吉備津宮の釜殿の竈の下八尺に埋めたが、なお 13 年間唸りは止まず近郷に鳴り響いた。ある夜、ミコトの夢に温羅の霊が現れて、「吾が妻、阿曽郷の祝(ハフリ)の娘阿曽媛をしてミコトの釜殿の神饌(ミケ)を炊(カシ)がしめよ、若し世の中に事あれば竈の前に参り給はば、幸あれば裕かに鳴り、禍あれば荒らかに鳴ろう。ミコトは世を捨てて後は霊神と現れ給え。われは一の使者となって四民に賞罰を加えん」と告げた。というわけで、吉備津神社の御釜殿は温羅の霊を祀るもの、その精霊を「丑寅みさき」というのである。これが釜鳴神事の起こりである。

もちろん、「おとぎ話」的要素の強い文飾がみられ、これらがそのまますべて史実を伝えているとは考えられない。ただ、藤井駿氏は、『梁塵秘抄』に「丑寅みさき」のことが見えることから、平安期にまでこの説話の成立がさかのぼれるとされ(13)、さらに門脇禎二氏は、古代吉備の語部が語り上げた内容の一部が底流となっていると考えておられる(14)。私もこの物語の背景にはなんらかの歴史的状況があったと考える。

この伝承が創られていく過程で、神主やその他重要神職を世襲していた賀陽氏が大きく関ったであろうことは当然であろう。そして、賀陽氏は先述のように、栄西も出した家で、代々学者を輩出した学問の気風を持った家柄であったから、さまざまな文献に通じ、そうした文献を参考に、文飾を行ったであろうことも想像に難くない。しかし、そうしてこの伝承をながめてみると、温羅が朝鮮と結びつけられていることは、あらためて注目されることであろう。それはやはり、賀陽氏のなかに、自分たちが朝鮮と、なかんずく加耶と関係が深い、あるいは朝鮮・加耶から出自したという言い伝え、ないしはそのような意識があったからこそではなかったろうか。

まず、温羅自身、百済から飛来したという。そして、「吉備冠者」といったという。「冠者」の発音は、室町時代からは「クワジャ」であるが、それ以前は「カンジャ」である。そして、これは普通、無官や召使いの若者に対して使うことばである。百済の王子だったという彼をそう呼ぶのは、ふさわしくないであろう。ところが、古く朝鮮半島では、首長の呼称として、「カン」「カン・ギ」が使われていた。しかも、新羅や百済では6世紀までには「王」に変更されたが、加耶では6世紀後半に滅亡するまで使用されていたというのである(15)。

また、温羅とミコトはそれぞれ雉→鯉、鷹→鵜と変身して戦ったが、これの類話が半島諸国の建国神話にある。ひとつは、高句麗の先、扶余王解慕漱が河の神河伯のむすめを娶るため、自分が天帝の子である証明をしようとするもので、『旧三国史』に、

> 於是河伯於庭前水化為鯉、随浪而游、王化為獺而捕之。河伯又化為鹿而走、王化為豺逐。河伯化為雉、王化為鷹擊之。河伯以為誠是天帝之子。

とある。もうひとつは、加耶諸国の一つである大駕洛国（金官加耶、現在の金海）の初代王首露が、新羅王脱解と王位を争ったときのことで、『三国遺事』紀異第2、駕洛国記に、

> （脱）解化為鷹、王化為鷲。又解化為雀、王化為・、于此際也。

とある。温羅伝説の話は解慕漱の話の方により類似しているように思えるが、高句麗と日本はあまり通行がなかったことを考えると、何か納得できないものを感じる。しかし、『三国史記』は 1145 年に金富軾が高麗仁宗に撰進したもので、『三国遺事』が13世紀の僧一然が著したものであるから、『三国史記』の方が『三国遺事』より手に入りやすかったかもしれず、そのため『三国史記』を参考にして、中世になって、温羅の説話は作られたのであったかもしれない。しかし、いずれにせよ、中国ではなく、朝鮮の神話を持ち込もうとしたという「作者」の意識には留意されるべきであろう。

そして、温羅が居城としたという「鬼ノ城」である。この物語の舞台ともいうべき所であるが、これは朝鮮式山城である。また「キ」は百済の古語で城を意味する。鬼ノ城は、1971年の高橋護氏による踏査以来、数度にわたる調査が行われ、その結果、遅くとも7世紀後半ごろ築城が始まり、7世紀末ごろから8世紀初頭ごろには城としての機能が有効に作用し、8世紀後半ごろまで存続していたとされた。そしてその時期からして、663年に朝鮮の白村江で日本軍が百済救援に失敗して新羅＝唐連合軍に大敗したことを受けて、防衛のために九州北部から瀬戸内海一帯に朝鮮式山城を築かせたことに連動して造られたものであろうと考えられている(16)。しかし、この鬼ノ城は記録には現れない。そこで、門脇禎二氏は、たとえば長門国の城には答・春初（トウホンシュンソ）、筑紫国の大野・椽の2城には憶礼福留（オクライフクル）・四比福夫（シヒフクブ）など、百済から亡命・渡来してきた百済官人や将軍が派遣されたが、鬼ノ城には中央の直接の技術指導がなかったから記録に現れなかったのではないかと考えられている(17)。とするならば、朝鮮式山城を、在地の力だけで築き上げたということであり、つまり、吉備には朝鮮式技術を持った人々がいたということになる。その技術者達を率いて築城の中心となったのは、鬼ノ城が賀陽郡の真ん中に築かれているということも含め考えれば、賀陽氏をおいてほかにはないであろう。

最後に注目されるのは、阿曽郷と鳴釜神事についてである。鳴釜神事に関しては、例えば、古くからの竈神信仰との関連や、釜で湯を沸かすときに釜が鳴った場合に陰陽師によって占ったり祈祷したりしたこととの関連が指摘されたり(18)、阿蘇の火たき乙女や琉球王国の女性神官聞得大君（キコエノオオキミ）、さらには世界的に分布する火を守る聖なる処女との関係を指摘する説もある(19)。阿蘇の火たき乙女の起源に関する伝説も、温羅伝説

との類似がみられ、これらの指摘は重要であるが、今ここで注目したいのは、阿曽郷との関係である。これについては、はやくから藤井駿氏が指摘されている。すなわち、阿曽郷、今の総社市西阿曽は、古くから鋳物師が多く住んでいた鋳物師の村であり、江戸時代には常に9戸の金屋があり、おのおの数十人の鋳工がかかえられていたという。そして、江戸時代にはそこの鋳物師によって神事の釜が作られたのであり、少なくとも永正年間（1504 ～ 20）には、そのような吉備津神社と阿曽村の鋳物師との関係があったことをうかがえるという(20)。しかし、いうまでもなく、吉備は古代よりたたら製鉄の国としてつとに有名であり、血吸川流域、阿曽のあたりは、そこから現在の賀陽町にかけて花崗岩の地質が広がっていて(21)、砂鉄の採集ができるところである。であるならば、さらに古くから阿曽には製鉄・鉄製品生産者達が住み着いていた可能性は大きいといえよう(22)。そして、製鉄といえば、加耶である。加耶の鉄生産は非常に早くから盛んであり、『三国志』魏書・東夷伝・弁辰条に、

国出鉄、韓・・・倭皆従取之、諸市買皆用鉄、如中国用銭。又以供給二郡。

とあり、弁辰（のちの加耶地方）の鉄を媒介として朝鮮半島・日本列島では交易が行われていた様子が記録されている。加耶の時代には、鉄・という板状にしたものが流通し、それがそのまま武器や農具の鉄素材となった。吉備のカヤ氏が加耶からの渡来人であったならば、当然、吉備の鉄生産に彼らは深くかかわっていたであろう。しかし、文献によってこれ以上、加耶と吉備を「鉄」によって結びつけることは困難である。砂鉄と鉄鉱石という原料の違いによる技術の違いなど、関連の立証にはまだまだ検証しなければならない事柄は多く、今後の考古学の成果が待たれるところである。

カヤ氏と上道臣・下道臣

さて、以上、5世紀末ごろから加耶からの渡来系の人々の勢力が吉備の中で新たに伸張してきたとする考えを展開してきた。しかし、この考え方は、現在の大勢とは少し違ったものである。おおかたには、カヤ氏を含めて吉備はある一つの「王族」から分かれて諸族が分立するようになった、と解すからである。最後にこれについての私見を述べておきたい。

結論から言えば、下道臣や上道臣らが一つのものから分かれたと考えることに反対する積極的な理由はない。しかし、カヤ氏に関しては、彼らが何よりも「カヤ」と名乗っていること、そして上に見てきたように、後世まで朝鮮との関連を強く意識していたらしいこと、また当時の諸状況などから考えると、やはり渡来系の人々の新しい氏族であったと考えたい。さらには、「積極的な理由」はないものの、少なくとも文献史料に見える吉備諸族のありかたは、今後さらに検討すべき余地があるように思えるのである。

つまり、彼らは、他の地域が「クニ」として統一していくのにたいして、結局分立したままであった点である。確かに、ヤマト政権からは、「吉備国」として一つに意識され、多くの論者が示されるように、一つの国といえる実態を持ってもいたと考えられる。しかし、だからといって彼らが元は一つであったといえる積極的証拠もまたないのではないだろうか。先に見た応神紀で、諸族は御友別の兄弟・子を始祖とするということが、ひとつの論拠とされる。しかし、例えば加耶諸国も兄弟であったと建国神話では語られるのである。また、『古事記』では、兄弟といっても異母兄弟として描かれるのであり、それを、元は別のものたちであったことの反映ととらえることは可能であろう。またあるいは、下道臣に繋がると考えられる造山・作山古墳は、ここに吉備の中心勢力があったことを物語る。しかし、これらは5世紀初期から中期のものとされ(23)、そのころにはすでに諸族は分かれていたであろう。

吉備がヤマトと対立したできごととしては、吉備下道臣前津屋の事件、吉備上道臣田狭の反乱、そして星川皇子の変があげられる。前津屋の事件と田狭の事件は、同じ時期に起きたからであろうか、いずれにも他の諸族が積極的に救援なりに動いたということは見られない。前津屋の場合は、30人のヤマト軍が吉備に攻めてきたにもかかわらずである。奇襲であったためであろうか。それにしても下道臣一族滅亡の危機に、誰も防衛に動かないのである。しかもヤマト軍は無事帰還すらしているようである。逆に、ヤマトのほうでも、前津屋の不敬を吉備国の反逆とはとらえておらず、下道臣一族の誅滅で決着している。他方、星川皇子の変では、「吉備上道臣等」が星川皇子救援のため軍船40艘を派遣している。諸族が協力して事に対処したということである。しかしここでも、吉備国の人々がというようには書かれず、星川皇子の係累である上道臣らがというふうに記録されている。後世においても、彼らは統一を指向するよりも対抗するような行動が目立つ。恵美押勝の乱前後の諸族の動向はその典型であろう。

吉備の連合は、それがどのようなものであるかは不明であるが、一枚岩の連合ではなかった。そのなかで

は、競争も対立もあったであろう。苑県を有した苑臣が、国造にならなかったことなどは、そうした生存競争に勝ち残れなかったからではないだろうか。あるいは、加夜国造の領域は、鳥越憲三郎氏に従えば(24)、カヤ氏が別れ出たという上道臣の上道県を分けた部分ではなく、下道臣の祖である稲速別が封じられた川島県の領域になるという。そして下道国造の領域は、苑県の部分になり、苑県に分封されたという浦凝別を始祖とする苑臣は先述の通り国造とはされていないのである。鳥越氏は下道臣を吉備の本宗といわれ、またこの措置はいかにヤマト政権の力が強かったかということではあろうが、それにしても本宗の故地をすっかり別の一族が受け取るというありさまには、本宗家を中心にして一体となっている吉備国という姿は見えない。

また、吉備と加耶との関係においても、そうした様子がうかがえた。当時倭の諸国はヤマト政権とは別に独自に外交関係を半島と持とうとしていたと考えられたのであったが、先述のように、吉備では「吉備国」が外交を行っていたというより、上道臣などが独自に展開していたようであった。史料ではことに上道臣が目立ったのであったが、これも、巨大古墳を築造できるほどの実力を持った下道臣、おそらくその勢力を支えたものには海外を含む交易があったであろう、その一族に対抗すべく、上道臣が積極的に加耶や百済と婚姻関係まで結んで勢力拡大を図っていたからではなかったろうか。

このように見てくると、カヤ氏が吉備一族から分流したと決めつける必要は何もないように思われる。『古事記』の描く系譜にカヤ臣が載せられていないのも、以上のように考えれば理解できるのではないだろうか。

おわりに

以上、古代吉備国におけるカヤ氏に関して考察を行った。その結果は、一般に考えられているものと違ったもので、吉備の賀陽氏は古代朝鮮の加耶から渡来した人々であったのではないかというものであった。

もとより文献史料だけでは制約が大きく、そのため憶測も多く、したがって「覚書」を越えるものではない。しかし、考古学的見地から、亀田修一氏は、５世紀前半には相当数の百済・加耶系の渡来人が吉備に来住していたことを証されている(25)。これらの人々がカヤ氏になったとする直接的証拠はないが、上に述べてきた文献からの推測と合わせるならば、カヤ氏は加耶系渡来人であったと考えてよいのではないだろうか。

最後に、交流史の観点から、今まであまり重視されてこなかったように思える点に留意しておきたい。それは、倭の諸国は鉄を求めて加耶と交通したというのであるが、では倭の側から「高価」であったはずの鉄と交換・交易できる産物は何を持っていったのか、という問題である。〈シンポジウム〉「伽耶はなぜ滅んだか」で東潮氏は、それは米であったろうと推定しておられる(26)。そうであるならば、あるいは、吉備はキビがその主力産品だったとは考えられないだろうか。だがはたしてキビが鉄と交換するに値すると、加耶の人々は考えただろうか。ともあれ、交流・交換は求める側にも、相手が多とする何物かがなければ成り立たないのである。これは今後考えるべき重要な問題であろう。

《注》

(1)　天平神護元年（765）六月一日条。

(2)　奈良県教育委員会『藤原宮』1969年、9頁。簡番号102。

(3)　藤井駿「加夜国造の系譜と賀陽氏」、『吉備地方史の研究』山陽新聞、1980年所収。

(4)　門脇禎二『吉備の古代史』ＮＨＫブックス、1992年、120頁。

(5)　鳥越憲三郎『吉備の古代王国』新人物往来社、1974年、98頁では、応神紀・『国造本紀』両書で同祖と明記していることから「上道国造の家系から、加夜国造が派生したことは確かだといえる。」とされる。この問題に対する私見は後述する。

(6)　津田左右吉『日本古典の研究』下、岩波書店、1950年、234頁。

(7)　坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀』（三）、岩波文庫、1994年、49頁。

(8)　吉田晶「吉備氏伝承に関する基礎的考察」、『吉備古代史の展開』塙書房、1995年所収、87～88頁。

(9)　柳田康雄「倭と伽耶の文物交流」、鈴木靖民・武田幸男・鬼頭清明・田中俊明・東潮・柳田康雄・尹容鎮・早乙女雅博『増補改訂版　伽耶はなぜほろんだか』大和書房、1998年、115～123頁。

(10)　田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館、1992年、70～77頁。

(11)　近藤義郎編『岡山県の考古学』吉川弘文館、1987年、250頁。間壁忠彦・間壁葭子『日本の古代遺跡23　岡山』保育社、1985年、123頁。

(12)　藤井駿「吉備津神社の釜殿と釜鳴神事の起源」、前掲書『吉備地方史の研究』所収、58～60頁。

(13) 藤井駿、前掲(12)論文 64 頁。
(14) 門脇禎二、前掲書『吉備の古代史』、65 ～ 71 頁。
(15) 武田幸男「朝鮮諸国の古代国家形成」、鈴木靖民・武田幸男・鬼頭清明・田中俊明・東潮・柳田康雄・尹容鎭・早乙女雅博『増補改訂版　伽耶はなぜほろんだか』大和書房、1998 年、29 ～ 35 頁。
(16) 村上幸雄・乗岡実『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版、1999 年、112 ～ 113 頁など。
(17) 門脇禎二、前掲書『吉備の古代史』、154 頁。
(18) 藤井駿「吉備津神社の釜鳴神事と鋳物師の座」、前掲書『吉備地方史の研究』所収。
(19) 大林太良「古代吉備の伝説」、『古代吉備国論争（上）』山陽新聞社、1979 年所収。
(20) 藤井駿、前掲(18)論文。
(21) 光野千春・杉田宗満編集『岡山県地質図（下部）』、内外地図株式会社、1979 年。
(22) ただ、「血吸川」という名称が、この川が血を吸ったように赤く見えることからつけられたとすると、もともとは鉄さびが河床に見えていた川であったのかもしれない。岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科の波田善夫教授のご教示によれば、血吸川上流左岸の山がれき層なので、隣接する花崗岩中の鉄分が溶けだしてここで空気に触れ、川に流れ込めば赤く見える可能性はあるという。ただ、現在の血吸川はざっと見渡せる範囲では、砂防も完備されて、赤く見える場所はない。
(23) 近藤義郎編、前掲書『岡山県の考古学』、248 ～ 249 頁、259 頁。
(24) 鳥越憲三郎、前掲書『吉備の古代王国』、97 ～ 102 頁。
(25) 亀田修一「考古学から見た吉備の渡来人」、武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版、1997 年所収。
(26) 前掲書『伽耶はなぜ滅んだか』、250 頁。

加耶 Kaya in Ancient 吉備 Kibi
— A Note on the History of Exchange between 吉備 and 加耶—

Toshio SHINO
Department of Socio-Information, Faculty of Informatics, Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan
(Received November 4, 1999)

There was a great family called Kaya（賀陽、加夜）in Kibi. It is commonly believed that there was one tribe in Kibi in ancient times, and that it developed into several families around the basin of the River Ashimori 足守.

However, contrary to popular belief, the Kaya family in Kibi is considered to have been a family whose ancestors were from Korea. There are variouse reasons for it :

1. "Kaya" was a general term for the group of small countries in the south of the Korean peninsula from about the 4th century to the 6th century.

2. Apart from the political power of Yamato, Kibi independently established diplomatic relations with Kaya 加耶 and Kudara 百済 by marriage. Therefor, there must have been a large number of people coming across the sea in Kibi.

3. The legend of 温羅 Ura at Shrine 吉備津 Kibitu, where the Kaya family took the position as a Shrine priest for generations, shows that Kibi cultivated friendly relations with Korea.

4. In the 6th cetury, the Kaya family in Kibi rapidly extended its power, whereas 加耶 in Korea went to ruin. The Kaya family in Kibi seems to have accepted a great number of refugees from 加耶 and broadened

its influence.